

内藤可夫 著

人間存在論叢書『ニーチェ思想の根柢』

(晃洋書房 一九九九年)

井上 克人

西暦二〇〇〇年はニーチェ没後百年という記念すべき年であった。二一世紀に突入り、数年を経た今日、日夜テロの脅威に怯えながら世界情勢はいよいよ緊迫の度合いを増しつつある。そればかりではない。ニーチェは、当時顕在化しつつあったニヒリズムが二百年かけてその最終帰結に達するだろうと予言していたが、今日の状況を見れば、神の死に替わって現代の神となった科学技術によって、地球規模で環境破壊が行われ、物質的には豊かな産業や経済システムが却って我々の精神的窮乏を引き起こしているのが現状である。こうした状況は、一言で言えば、社会や産業、政治システムに見られる「近代化」がもたらしたものであり、ニーチェが予言したニヒリズムはますます完成の域に達してきたと言ふべきなのかも知れない。もちろん現代は二

ーチェの生きていた時代とは具体的な状況は異にしているが、人間存在の「意味」を求めるべき場所が失われていることに何ら変わりはない。我々を取り囲む状況は、近代の思想が提示した理念の土俵上にあり、じじつ、今日の哲学的・思想的状況はまったく閉塞したものになっていと言わざるをえない。言い換えればヨーロッパの文化的・哲学的伝統の根柢に潜むニヒリズムが、いまだ克服されず、それどころか一層危機感が強くなってきたのである。

ところで、今回紹介する本書は、そうした近代化がもたらしたニヒリズムをいかに克服すべきかをニーチェの思想の根柢を主体的に探りつつ打開していこうとする真摯な試みであり、本格的なニーチェ論である。質の高い研究書であると同時にニーチェの哲学の根幹を明確に浮き彫りにしている点

で、ニーチェの正しい理解を得るための優れた導きともなる。ニーチェの置かれていた歴史的背景をしっかりと踏まえながら、彼本来の問題であった「ニヒリズム」を、どこまでもテクストを忠実に読み解きながら解説しているところに本書の優れた特質がある。そこで以下、簡単に内容の紹介を試みたい。

本書は序論「ニーチェ思想の可能性の検証のための手続き」と、第一部「ニーチェの思想の理論的側面」および第二部「ニーチェ思想の根柢」、更に附論として「環境問題と近代文明克服の可能性」からなる。この内第一部と第二部の各章のタイトルだけを列挙すれば、以下のとおりである。

第一部

第一章 ニヒリズム

第二章 生成概念と生成の世界

第三章 権力への意志概念

第二部

第四章 「生」の概念と事実的な生

第五章 ニーチェにおける「身体」

第六章 ニヒリズムを克服する生

——強者の中腑と自然の像

第七章 創造と立法

——「未来の哲学」の可能性

著者は序論で、ニーチェの哲学の意図するところが、近代化を生み出したヨーロッパの文化的・哲学的伝統からの超越と「未来の哲学」の構築であったことを指摘する。ヨーロッパの文化的・哲学的伝統の根柢に潜むもの、それはニヒリズムに他ならない。生が危機に瀕し、もはや生に意味を見出せない逼塞した精神状況から脱却し、豊饒な意味ある生を取り戻すことがニーチェの目的とするところであった。ニーチェは自らの思想を「転倒したプラトニズム」(目録「Ios」)として理解していたが、彼にとって克服すべきヨーロッパの文化的・哲学的伝統とは詰まるところプラトニズムであった。それは著者によれば第一に「仮構された超感性的世界に価値を置くことによつて事実的生を無みにしているということ」であり、第二に「歴史的なものであるはずの生を持統的、同一的で自己原因的な存在者から捉えている」ということである。ニーチェにとつてはキリスト教もプラトニズムに制約されており、それは「ルサンチマン(怨恨感情)」に根ざし、現実を超えたところに淨福の世界を仮構したものに過ぎない。こうした現実の生の否定と彼岸の世界の仮構は、己自身の否定に他ならず、それ自身閉じられた構造になつてしまつてゐる。結局のところ、プラトニズムもキリスト教も、

そのいづれもが生きた具体的現実に対して開かれたものとはならず、いわば人間の理性的能力の範囲内にそれを封じ込めたものとなつてゐる。しかし、ニーチェは「神の死」によつてその封印が破られたものと捉え、身体や情動などの無視されてきた生の側面を主題的に取り上げることによつて、ヨーロッパの文化的・哲学的伝統がもつ理性の絶対性に基づく閉じた構造を打ち破ろうと意図したのである。

ところで、本書のニーチェ論における重要なポイントには、ニーチェのニヒリズム克服が存在論的な議論において試みられてゐることを指摘してゐる点(九頁)であろう。つまりニーチェによつて克服されるべきヨーロッパの文化的・哲学的伝統の特質は、「持統性・同一性・自己原因性」が規準となる「存在」を究明することであり、それを克服し回復されるべき生とは、絶えず流動して止まない、無垢なる「生成」なのである。認識が可能な「存在」とは対照的に、「生成」は従来のヨーロッパの形而上学がその特質としてもつ理性的認識では捉えられないものである。著者はそこにニーチェのいわゆる「権力への意志」を見ようとする。すなわち、「権力への意志」はそれ自身認識不可能であるはずの「生成」のうちに見出せるものであり、しかもこの概念は

「権力」や「意志」という語において何らかの事態を積極的に表現しようとするものであり、したがつてこの「権力への意志」こそ、著者によれば、認識不可能であるはずの「生成」の内に近代哲学とは別の何らかの思索によつて捉えられるものでなければならぬのである(九三頁)。

著者は更に、ここに見られる「権力への意志」の積極的な規定として、(1)「パトス」であるということ、(2)「最も基本的な事実」であるということ、(3)そこから「生成」や「作用」が生じることの三点を挙げ(九五頁)、その意味を次のように推察する。世界とは我々自身がその内で生きてゐる現実の世界であり、本質的に関係の世界なのだが、この関係は「量」の関係であり、それは権力への意志と名づけられる。「生成」や「作用」といつた具体的な事象はこの関係世界のダイナミズムの稜の内に成立し、この世界が関係世界である限りにおいて、それらの具体的な事象は我々自身がこの世界の内に現実生きてゐることによつて初めて成立する。したがつて世界の内に我々が生きてゐるという「事実」こそが、「生成」や「作用」の条件であり、「権力への意志」が「最も基本的な事実」であるとは、権力への意志が我々が生きてゐるといふ「事実」に基づく概念

であることを意味する（一〇一頁）。

そこから著者は更に次のように規定する。「権力への意志」は我々が「認識」する具体的な世界が事実として生起するそのダイナミズムのだが、第一にそれは「量」の關係のダイナミズムであり、それは我々自身が「事実」としてその關係の内にあることによって初めて成立する。第二に、この「量」の「關係」において我々が「認識」する「存在」が生起する。つまり我々が「認識」するあらゆる「存在」は「権力への意志」である。そして第三に、権力への意志は単に「存在」であるだけでなく、その生成変化自体を惹起するものでもある。つまり、権力への意志は我々が「認識」する世界の具体的な生成変化そのもののダイナミズムなのである。以上の三点から、権力への意志は我々が「事実」として「認識」している世界の「存在」とその生成変化とを「量」の關係のダイナミズムへ還元する概念なのである（一〇六頁）。

ところで、ニーチェはニヒリズムを様々な仕方で克服しようと試み、なかでも権力への意志概念の構想は、理論的な仕方であつたものであつた。しかし理論的に語ることは、「哲学的」に語ることは、そのこと自身ニヒリズムであらう。なぜなら「哲学」はヨーロッパの伝統の根本的特質だか

らである。我々は絶えず生成して止まない流動する世界に生きていたのであつて、そうした世界は認識しえないのである。したがつて第一部で論じられた「権力への意志」概念、および「生成」概念も、じつは「存在」を前提にした上での考察に過ぎなかつた。「生成」とか「作用」といつても、それは「存在」の生成、「存在」の「作用」に過ぎず、つまるところそれは形而上学に他ならない。そこで第二部では、ニーチェの哲学的・理論的ではない著作を手がかりにニーチェ思想の根柢を探っていく。

第二部では形而上学と峻別された「事実的な生」が中心テーマとなる。この事実的な生がその事実として生起されている生の立場から語られる。そこで重要なキーワードとして挙げられるのは「ディオニソスの基底 (dionysischer Untergrund)」という言葉である。周知のようにニーチェには「アポロンの」と「ディオニソスの」という対概念がある。前者はニーチェの定義によれば「完全な対自存在への、類型的な個体」への、簡潔化し、際立たせ、強く、明確に、一義的に、類型的にするすべてのものへの衝動、すなわち、法則のもとの自由」であり、後者は「統一への衝動、個人、日常、社会、実在を超え出て掘みかかるとはたらく」である (VII, 14 [4]) (一四

七頁)。著者は更に、この両者の対立がそこから生じてくる根源としてニーチェが示唆する「ディオニソスの基底」に着目し、「ディオニソスの」という語に二つの意味があることを指摘する。一つは「アポロンの」に対する対立概念としての意味であり（ディオニソスのA的）、もう一つはアポロンの生をもその内に包み込む全体的生としてのそれ（ディオニソスのB的）である。

この内ディオニソスのA的生は、陶醉、忘我の内であり、生成それ自身になることであり、主体に由来することなく、パトス的、受動的なものである。ところがこの両者はディオニソスのB的基底から生じてきたのだと言う。ニーチェがディオニソスのB的基底を示唆することで意図していたのは、対自的な存在や個体を許さないものであり、したがつてその内には原因それ自体はなく、つまるところ、それは「生成の世界」に他ならない（一五四頁）。こうした基底を主張することは、世界や自己を存在者として把握することの拒否であり、アポロンの生の絶対化の拒否に他ならない。しかし、著者によれば、ディオニソスのなものも、アポロンのなものとの対立の内でのみ初めて我々に捉えられうるようになるのであり、たとえ仮初めのものであつても、単純化され一義的に把握された存在者の世界があら

われるのはこの対立においてであり、己の生が自己原因的な自己、自由を持つ主体として把握されるのも又この対立においてであることを指摘する。

以下、ニーチェにおける「身体」の問題や、ニヒリズムを克服する生として、ニーチェの自然像に言及しており、極めて示唆に富む興味深い思索が展開されていくが、紙幅の都合上、割愛せざるを得ない。

「むすび」で著者は、大略次のように結論づける。

本書はニーチェの後期思想における諸概念の背後に彼の根本的な主張を探り、彼の後期思想が人間の理性の有限性の自覚を通じて、自然とその内にある人間存在を「大地」と「大地の意味」として把握したということを考察したものである。ニーチェはヨーロッパの文化的・哲学的伝統をプラトニズムと捉え、それが理性的認識に閉塞されたニヒリズムに他ならず、その克服を意図したにも拘らず、権力への意志概念および生成概念の導入は、それ自身近代哲学と等しく形而上学的な態度に留まるといふ矛盾が伏在していた。しかし他方、大地に信頼する生を求め、そこに新たな哲学の可能性を開いていることにも注意されなければならぬ。それは理性の有限性を自覚し、大地に信頼する生のあり方に具体的な形を

与える「未来の哲学」である。ニーチェはこの「未来の哲学」について「創造」あるいは「立法」という条件を提示していた。それは自らは根拠を明かさぬ「大地」に信頼し、己に由来しないものに開かれてあることよって、初めて己に生起する哲学なのである。

更に著者は、ニーチェによる「未来の哲学」の構想に二つの意義があるとし、一つには、大地に信頼する生を獲得し、そのことよって人間の有限性への理解を前提とした哲学の可能性を開いたことであり、もう一つは、近代哲学における人間理解を脱したところに生の根源的なありようを具体的な事象として捉えたことである、と言う。

最後に附論「環境問題と近代文明克服の可能性」についてだが、簡単に触れておきたい。ここで著者は、環境倫理学の条件を模索するなかで、自然と人間との関わりでの存在論的次元にまで遡り、文明的なレベルでの批判を提示している。それは自然環境に対する個人の倫理的・道徳的問題を超えて、理性の有限性を自覚し、新しい自然の、あるいは存在の理解の仕方を獲得することであり、それは取りも直さず、新たな思索を模索するニーチェの思想にその手かりを見出すことにもなるのである。

(いのうえ かつひと・関西大学)